平成27年度　学校自己評価表

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。

今年度の重点目標	1　主体的学習者の育成 2　進路指導の充実 3　積極的な活動の創成 4　広報連携力の発展と国際理解教育の充実 5　定時制教育の充実

年度当初					評価結果		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期へ向けての改善方策
1．主体的学習者の育成（企画推進）	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・生徒自身の学びが内発的となり、日々の学習が緊張感と落ち着きの中ですすめられている。 ・学校生活が品位ある言動に満ち、生徒は環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・生徒全員が部活動に加入し、部活動が学習との両立の中で、「心技体」を鍛える主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性、同僚性のある指導が出来る。	・多くの生徒が落ち着いた態度で学習に取り組んでいるが、指示がないと学習に取り組めない、受け身的学習になっている生徒が多い。 ・校内では、挨拶など礼儀正しく節度ある行動を取れる生徒が多いが、公共の場でのマナーに幼さの残る生徒がいる。 ・部活動への加入率は96.2%と高く、活動内容や部室の使用状況も改善されてきたが、学習との両立ができていない生徒がいる。 ・分掌にとらわれず、協働の精神を実践しようとする教職員が増えてきた。	・教科を越えた連絡会を持ち、各教科における生徒の内発性を導き出す工夫やノウハウを共有する。 ・利己的な言動の見られる生徒に対しては、毅然とした態度で指導し、保護者と協力しながら集団の一員としての立場を意識させ、自分の言動が周囲に与える影響を深く考えさせる。 ・部活動の時間を保障することに心掛け、開始・終了時刻を守るけじめある部活動を目指す。また、学習不振者に対しては部活顧問、担任、教科担任が互いに連携して指導に当る。 ・学年会・分掌部会・教科会・主任会が報告だけでなく、課題を共有し、様々な立場から意見を出し合い、問題解決、改善の場となるように努める。	・「アクティブラーニング」型授業は、全教科において定着してきたが、授業アンケート結果を見ると、生徒の自主的取組につながっていない。 ・担任の粘り強い指導により、遅刻する生徒も減ってきている。特に3年生では「遅刻0の日」が55日／76日（7月まで）と成果が現れている。 ・提出物の徹底などの指導を通して多くの生徒に改善の兆しが見られるが、主体的な家庭学習ができていない生徒も依然として一部見られる。 ・考査前、考査後の追指導は、顧問の了解の下、各教科で指導が出来た。 ・「率先垂範」に関する教職員アンケート（良い：4，まあまあ良い：3，あまり良くない：2，悪い：1）では、全体の結果は3．0であったが、「分掌外でも早急な対策のための助言や提案をしている」の項目は2．8と低かった。 ・各学年・分掌・教科主任による主任会では、学校で何が問題で何をやるべきかそれを指摘し合える会として効果的に機能していない部分がある。	C	・生徒の自発性を喚起する「アクティブラーニング」型授業にするには、授業の質を高めるしかない。各種研修や先進校視察で学んで来たことを教員全体で共有し、各教科で研究協議を深める。 ・担任や教科担当の指導を継続するとともに、保護者や部顧問とも協力し多角的な指導を行う。 ・部顧問は、競技力だけでなく下校指導と家庭学習の定着・充実に向けての指導を続けて行う。 ・今後は、主役である生徒のためにどんな教職員集団であるべきかを念頭に問題点を明確にして、学年・分掌の枠を超えて広い視野で取組む姿勢を主任から全教職員に示し広げる。 ・検討した具体策が効果を上げているか検証が必要である。
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・昨年度まで研究推進してきた「アクティブラーニング」の考えを発展させ、教職員研修の成果が日々の学習指導を通じて、生徒に還元されている。 ・生徒の学びがテストや大学受験といった実利的目的にとどまらず、真理探究や社会貢献といった高次な目標に向かうものとなっている。さらに、生涯にわたる学びの意義や教科の魅力を理解し、学習が内発的・主体的なものとなっている。	・「アクティブラーニング」の目的や効果を多くの教職員が理解し実践しているが、授業の中での効果的な実践方法については教職員の力量に頼るところが大きい。 ・学びの意義を理解し、主体的に学ぶことができる生徒も増えてきたが、まだ「やらされる学習」「与えられる学習」にとどまっている生徒も多い。 ・教職員の側にも「与えないと学習しない」という意識が依然として残っている。 ・アクティブラーニングを成立させるための、家庭学習や暗記事項と連動した授業づくりを研究中である。	・校内研修や研究授業等を通して「アクティブラーニング」に関する知識や技術を全ての教職員が習得するとともに、65分授業に合う東高独自の授業スタイルについて科内で検討し、モデルとなる方法を策定する。 【校内理論研修①…7月14日　講師　杉山二季氏（東京大学特任助教）】 【校内理論研修②…9月18日　講師　中村洋子氏（埼玉県教育局高等教育指導課） 示範授業　癸生川大先生（市立浦和高校）】 ・校外理論研修や校外教員との交流を通じて、指導力・実践力の向上を図る。 【県主催研修…年間4回　国語・地歴公民・数学・理科・英語】 【校外教員との交流…地歴公民・数学・理科】 ・より質の高い「アクティブラーニング」を通じて、主体的な学びの楽しさや価値をより多くの生徒に体感させることで、生徒の内発性・主体性を促進し、その後の学習活動につなげていくことができるような授業を実践する。 ・教科間でアクティブラーニングについて連絡会を開催し、本校のあるべきアクティブラーニングのかたちについて検討する。	・計画通り、「アクティブラーニング」理論研修を2回実施できた。9月に実施した数学の研究授業は癸生川先生(県外講師)から有効な意見をもらうことが出来た。 ・各教科で、前期、後期に1回ずつ研究授業を予定しているが、未実施の教科がある。 ・手法については定着しつつあるが、学業成績に反映されるところまでには至っていない。 ・家庭学習調査より、昨年と比較して1，3年では伸びているが、2年生では減少していた。1年では伸びたとはいえ、目標とする3時間には達していない。 ・生徒アンケートの結果から、自発的な取組に問題があることがわかった。 ・多教科参加の小委員会をつくり、「アクティブラーニング」を教科を越えて検討できる体制が出来た。	C	・転入教職員に本校の「アクティブラーニング」を理解してもらうためにも、第1回教職員研修は5月の早い時期に実施する。 ・授業は基本的に公開となっているので、積極的に授業を見せ合う体制を作る。 ・「アクティブラーニング」の目的や期待する効果について、研修担当から教科主任に再確認する。 ・1年生のオリテン合宿で「アクティブラーニング」の取組方を指導する機会を持つ。 ・生徒に「アクティブラーニング」の狙いと、アクティブラーニングの成功には自主的な取組の充実が不可欠であることを理解させるため、「アクティブラーニング」の概念図を作成し、教室に掲示する。 ・知識定着のために必要な取組を実施すると共に、「アクティブラーニング」の目的を達成するために倉東独自の取組を進める。
2．進路指導の充実（キャリア形成）	OJTの充実と進路指導力の継承 ※OJT オン・ザ・ジョブトレーニング	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。 ・全教職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・「倉吉東高のかたち」における「21世紀をリードする人材の育成」とキャリア形成とのつながりが十分に理解されてはいない。社会貢献という観点を含めた進路設計ができない生徒が一部見られる。 ・3年生の進路検討会に加え、1・2年生の進路検討会の参加者も増え、教職員の意識は向上した。一方で、生徒の志望は多様化しており、教職員の指導がますます重要となっている。	・「倉吉東高校のかたち」の理念の生徒・保護者への浸透を本校の教育活動にあらゆる場面で心がけるとともに、生徒が自分と社会との関わりの中で進路選択に主体的に取り組めるよう指導する。 ・1・2年の進路学習の内容を改善し、大学調べや学部学科調べを、社会貢献という観点を含めて生徒が自らの進路を考える機会としてとらえ、指導の充実を図る。 ・各学年の進路検討会において積極的な発言を促すとともに、担任団と分掌の連携により充実させ、学力の分析充実に基づいて生徒一人ひとりが適切な進路志望がもてるよう工夫する。 ・研修等で得た情報の共有を一層進めるとともに、担任が的確な進路指導ができるよう学年間での連携を図る。	・育友会総会、学年保護者会、進路のしおり等を通じて、人材育成としての面を強調し、キャリア形成の重要性を説いてきた。進路のしおりでは、今年度も生徒とその保護者に執筆を依頼し、保護者の目線での原稿を掲載した。また、学年独自で入試に関する保護者会を実施し、保護者の意識高揚に努めた。 ・夏季休業を使い、1年生では大学調べ、2年生では学部・学科調べを実施し、各クラスで発表を行い、意識づけを行った。 ・新旧3年担任会への参加者28名、3年進路判定会への参加者32名であり、昨年度に比べ、参加者が減少した。内容の濃い会議であるので、参加者の増加を促したい。 ・研修会での内容については、回覧等により教職員との資料の共有ができている。また、学年団と連携し情報共有を行っている。3年進路判定会を通じて、進路指導に関する学年間の連携を図った。	B	・生徒に対しては、今後とも学年集会や講演会を通じて、21世紀のリーダーに必要な資質や学びについて、積極的に伝えていく。また、他の分掌とも連携し、保護者向けの講演会の内容の充実を図る。 ・1・2年については進路学習が本格的に始まる。1年生については、大学と受験科目調べ、2年生では社会貢献の観点からの学部学科研究へと深化させる。学習への動機付けとなる志望理由がもてるよう指導を充実させる。 ・3年判定会議（12月）・出願会議（1月）、1・2年進路検討会（1月）において、積極的に発言できるよう、資料を早めに配布するなどの工夫を行い、充実を図る。 ・教科学年分掌主任会の内容を充実させ、学年間での連携を一層図るとともに、必要があれば、学年主任が集う会を設ける。
	中堅・難関大学合格者数の向上	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数70名以上。 （現役合格者数50名以上） ・難関大学現浪合格者数20名以上。 （現役合格者数15名以上） ・東京大学現浪合格者数5名。 （現役合格者数3名以上）	【国公立大学現役合格者数】 H24年度140名　H25年度120名　H26年度131名 ※H25年度より5クラス 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H24年度52名　H25年度49名　H26年度45名 【難関大学現浪合格者数】 H24年度21名　H25年度25名　H26年度18名 【東京大学現浪合格者数】 H24年度2名　H25年度1名　H26年度1名	・1年次から志望校指導を行い、3学年を通じて適切な進路目標を設定できるよう支援する。 ・学習習慣の確立を意識した初期指導を充実させるともに、定期考査や模擬試験における学力分析を活かしながら、設定した志望が実現可能となるような学力の育成を目指す。 ・1・2年において、学習習慣の確立及び維持・向上に努め、学力中位層以上の拡充を図る。 ・授業及び3年放課後課外等の内容の充実させ、記述力の育成を図り、学力中位層以上が厚くなるように努める。 ・県外高校との交流や本校独自の講座を通じて目標達成のための意欲を高める。 ・3校合同対策講座や課外などによりチーム化を図り、互いに切磋琢磨できる環境づくりを行うとともに、指導の開始時期を例年よりも早め、超難関校への現役合格を目指す。	・各学年とも志望校調査を2回実施した。概ね適正な志望校であるが、学力の面で不十分な生徒に対する指導が課題となっている。 ・各学年とも学力中位層の薄さが課題となっている。学習時間の確保、学習の内容等で、生徒が学習に積極的に取り組めるような仕掛けや面談が必要な状況にある。 ・放課後質問に来る生徒が増えつつあり、学習に前向きな生徒が増えつつある。 ・9月から放課後課外を実施。内容面での充実（分野別対策や記述の育成）を例年以上に目指している。 ・2年生の県外高校との交流は11月に実施予定。1年生の講座については、現在検討中である。なお、大山学習合宿終了後に1・2年ともにOBと懇談会をもち、高めの志望校をもつ意義を感じる機会をもった。 ・3校合同対策講座への参加者は8名。昨年度より減少したが、意欲の高い生徒が集まり、積極的に取り組んでいる。	C	・学年進行で適切な進路目標がもてるよう、1・2年の進路検討会の時期を例年より早め、担任が面談を行える時間を確保する。 ・教科主任会で出ている情報が共有され、教科担当者が授業や指導に活かせる状況にする。 ・生徒の学びへの自覚が促せるよう、個別面談を充実させる。 ・前年度の反省を生かし、生徒の状況を的確に把握し、学力向上に努める。 ・CT後の特別課外の内容が充実するよう検討を進める。 ・2年生は11月の交流以外についても検討中。1年生については早期に提案し、志望校維持ができるように支援する。また、大学訪問（2年）や首都圏研修（1年）を通じて、生徒の意欲を高める ・今後、放課後課外とも連動させグループ化し、個別指導をさらに展開する予定。1・2年生については、他校との交流や独自の講座を通じて、意識づけを行う。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期へ向けての改善方策
3. 積極的な活動の創成（**活動創成**）	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自己のリーダーシップを自覚し、より高きを目指す創造的な態度で生活している。 ・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対して当事者意識を持っている。 ・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少なくないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。 ・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、その社会に疑いを持ち、よりよくしていこうとする態度が不十分である。 ・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活を消極的に過ごしている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、将来への不安や見通しの悪さから、今現在を充実させきれない生徒がいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発動せざるをえない場面を数多く設定する。また、生徒に適切に指導・助言を行うことで、それらの行事が本来目的としている領域に到達できるよう、創造性を十分に発揮させる。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自己と社会との密接な関わりを意識させる。その際、学年団や他分掌との連携を密にする。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通しさまざまな失敗を経験させ、現実を堂々と受け止められる強さをはぐくむ。また、教育相談を充実させるとともに、生活に消極的になった生徒に自分が出来ることを少しずつ達成させる成功体験を積ませることによって、自信を取り戻させる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自身の手で計画、準備、運営させることにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。また、そこで経験したことや学んだことを言語化する活動を通し、それからの日常生活に生かしていけるような力とする。	・前期生徒会執行部（会長1、副会長2）は、多くの学校行事を通して、生徒への周知や運営に難しさを感じる一方で、生徒会活動の楽しさ、達成感を味わうことができた。 ・交通事故発生件数については前年同期より減少したが、特に自転車通学や自動車による送迎等の通学マナーに関して依然として問題がある。 ・素行等による生徒への指導はほとんど見られない。 ・夏季休業終了までに1年生でボランティアに参加した生徒は75名であった。 ・1年生には、入学当初の大山オリエンテーション合宿でスクールカウンセラーによるコミュニケーション演習を実施した。新入生の不登校生徒は0名。 ・不登校傾向にある生徒にも学校行事おいて様々な役割を与えることで、達成感や充実感を感じられるようにした。 ・気になる生徒については、担任、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、教育相談担当教職員がすぐにケース会議を開催できる体制を構築しつつある。 ・学園祭や高校生フォーラムは、準備期間が例年より短い中、各セクション、パートのリーダーを中心に主体的に企画立案から運営までを行った。また、各反省会では、上級生から下級生に対して、継続すべき点や問題点等の引継を行った。	B	・後期執行部については、次年度の学園祭実行員や高校生フォーラム実行委員を務める生徒が多いため、校内の様々な活動を通してリーダーシップを育成していく。 ・通学マナーの向上について、生徒に対して継続して意識の向上を働きかけていく。 ・次年度に向けて、薬物乱用防止教室及び交通安全教室を特に1年生が早い段階で受講できるよう開催時期を見直す。 ・12月のボランティア発表会に向けて、1年生全員が参加するよう、声かけを行っていく。 ・気になる生徒に関するケース会議が必要に応じて迅速に開催できる体制を維持し、早期に各方面から対応していく。 ・今年度開催した学園祭やフォーラムの問題点等について、次年度の生徒実行委員会に引き継ぐとともに、今年度の後期から次年度の学校行事の運営に向けて問題意識を持って学校生活を送るよう指導していく。
4. 広報連携力の発展と国際理解教育の充実（**連携発信**）	中高連携の発展	・中高の連携が進み、効果的・一貫的な英語の指導ができている。	・中学校とのスクラム教育を行い、中高教員の交流と相互の授業研究が進んではいるが、まだ十分であるとはいえない。 ・中学生英語ブラッシュアップ講座を実施しているが、参加者の満足度が高いにもかかわらず、希望人数が伸び悩んでいる。	・今年度も東中・河北中と英語教育で連携し、本校教員による中学への乗り入れ授業を実施する。 ・長文読解を中心として、家庭学習の充実、読む量・スピードを上げる手法について継続的に研究協議会を持ち、授業改善を図る。 ・相互の授業参観の機会を増やし、相互理解を深め、授業力アップに繋げる。 ・体験入学の際だけでなく、中学校訪問説明会など機会を捉えてPRしていく。 ・中学生にとって魅力的な講座となるように内容を充実させ、中学校の学校行事等に配慮し、中学生が参加しやすい環境づくりを行う。	・乗り入れ授業は東中2回、河北中3回実施(9月末現在)。相互の授業参観は、東中及び本校が7月に実施した公開授業にそれぞれ複数の教職員が参加し、実態把握に努めている。 ・中高担当者の研究協議を毎週木曜日の午後に設定し、継続的に研究テーマについて話し合いの場を持っている。 ・機会を捉えてPRをし、今年度の参加者は88名となった（昨年度79名）。中学生の実態に合わせて時間設定をしたり、授業の進め方を議論するなど、昨年度の反省を生かした取組をめざしている。	B	・年間計画に従って乗り入れ授業及び授業参観を実施し、中高連携をより効果的なものにする。 ・参加した中学生の様子を基に、内容の充実についての検討を行う。
	交流活動の推進	・さまざまな国際交流の機会を通じて自国の理解を深めると共に、他国の文化や価値観を理解・尊重し主体的な交流が促進されている。	・国際高校生フォーラムや交流事業を行っているが、積極的にホームステイに参加したり、ホストファミリーになりたいという希望が少ない。 ・交流が参加した一部の生徒のみに留まっており、全校的な広がりになっていない	・育友会総会の前の「大人（おせ）の一言」で国際交流をされている方や、ホームステイを受けていただいた保護者の方にお話いただき、異文化と触れる意義や楽しさについての生徒の意識を高める。 ・韓国研修のホームステイの交流を共有する学習の場を設けたり、国際高校生フォーラムでの交流を、多くの生徒が参加できるような内容にするよう工夫する。	「大人（おせ）の一言」の際は、外国滞在経験がある保護者や、ホームステイ受け入れ経験のある保護者からお話しをしていただき、またソ・ヒョンソプ先生を招いての講演会を行うなど、生徒が国際交流の意義を理解する機会を多く持つことができた。また韓国研修事前研修会を通じてホームステイのPRをした結果、過去最多のホームステイ希望者を募ることができた。 フォーラムの際の交流は、例年並みのものに留まったが、6月のロシアとの囲碁交流の際は、囲碁部だけでなく新聞部の生徒も歓迎の飾り付けを行うなど、担当部署以外の生徒も巻き込んだ交流を行うことができた。	B	・来年度の安養高校の生徒の受け入れの際は、保護者及び生徒対象の説明会を行い、ホームステイに対する興味関心を高めて「やってみたい」と思っていただくことが必要である。 ・11月に開催される近畿高総文祭に参加する江原道の生徒のホームステイをはじめとする県の取組を活用し、国際交流に参加する機会を広げる。
5. 定時制教育の充実（**定時制**）	授業規律の確立と授業改善による学力向上と希望進路の実現	・規律ある学習態度で授業に臨むとともに、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・分かりやすい授業と生徒の実態に合ったきめ細かな指導を行うことで、生徒の学習意欲や学力が向上している。	・多くの生徒が落ち着いた態度で授業に取り組むことができるようになってきている。 ・学校紹介による正規雇用を目指す生徒が増えるとともに、4年制大学や短大など上級学校へ進学する生徒も出てきたが、具体的な進路目標を見出せない生徒もいる。 ・基礎的な学力と学習習慣が身についていないため、理解に時間がかかったり、途中で諦めてしまう生徒が多い。	・授業規律の徹底に努め、生徒が落ち着いて学習に取り組める環境の向上を推進する。 ・担任だけでなく、進路担当やキャリアアドバイザーとも連携しながら、一人ひとりに適した進路目標を早期に見つけることができるよう指導を行う。 ・授業改善に努めるとともに、個別指導や面談を通して生徒が学習意欲を維持・向上できるよう指導する。	・多くの生徒が規律ある態度で授業に臨んでいるが、一部に安易な遅刻や居眠りなどが見られる。 ・多くの生徒が進学・就職希望いずれも学校の指導を受けながら、それぞれの進路目標の決定と実現に向けて努力している。 ・多くの授業で、ICT機器を使って生徒の意欲や関心を引きつけたり、理解を深めるなど授業の改善に努めている。	B	・遅刻や居眠りに対しては毅然とした態度で指導を継続し、引き続き学習環境の維持向上に努める。 ・全教職員で協力しながら進路指導を継続するとともに、進路未決定者については安易な方向に流れることのないよう面談等を通して丁寧な指導を行う。 ・一部に苦手・嫌いな科目で消極的な態度が見られる生徒がいるが、その科目の必要性や楽しさを理解させるための指導を継続する。
	生徒の主体性の育成	・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことによって、企画・運営など社会で必要とされる力を身につけることができる。	・昨年度から生徒会が主体となって行事を行い、少しずつ企画や運営に携わる生徒が増えてきている。	・生徒会を主体としながら、より多くの生徒が企画や運営に携わることで、連帯感や達成感をもてるような仕掛けを工夫する。	・七夕祭りや生徒総会・壮行会などの行事では生徒が中心となって企画・運営を行い、達成感を味わうと同時に裏方的な役割の重要性を認識できた。		・クリスマス会・かるた大会・球技大会では生徒に任せる機会をさらに増やし、運営する側だけでなく参加する生徒にも有益な行事になるよう工夫したい。
	積極的な生徒指導	・あらゆる機会を捉えて積極的に生徒との関わりを持ち、生徒の実態を的確に理解し、効果的な指導を行うことができる。 ・家庭や職場と連携し、校外での生徒の様子を把握しながら、協力して生徒を支援することができる。	・情報交換会を毎日もち、面接や日々の会話を通じて得た生徒に関する情報を全教職員で共有し、指導に生かしている。 ・家庭訪問や職場訪問を行い生徒の様子を理解しようと努めている。	・情報交換会を継続し、生徒に関する情報の共有に努めるとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携してよりきめ細かな指導を行う。 ・学校から家庭への連絡や情報発信を継続するとともに、保護者会などを通して信頼関係を構築し、家庭から学校へ連絡や相談をしやすい体制を維持する。	・毎日の情報交換会は非常に充実しており、学校運営・生徒理解上有効に機能している。 ・7月保護者会で学校の教育方針や教育活動に対して概ね理解していただいていることが分かった。		・今後も情報交換会を継続し、情報共有・意見交換の場として内容をさらに充実させていく。 ・今後も粘り強く働きかけを続けていき、生徒の成長には家庭のサポートが不可欠であることを伝えていく。

○ 評価基準

A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。

B 課題はあるが、改善に向けた取組が効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。

C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。

D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。